

いわゆる「コロナ時代」をどう生きるのか

——人間的自由の危機に際して——

近藤 剛

はじめに

人類の歴史は感染症との闘いであると言われることがあるが、まさに今、私たち自身がその渦中（禍中）にある。2020年1月9日、中華人民共和国湖北省武漢市における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の発生事例が当局から公式に発表されて以来、世界は瞬く間にパンデミックに直面することになった。実際は、その前年末頃より確認され、一部では警告が発せられていたにもかかわらず、大手のメディアは十分な取り扱いをせず、私たちの国も含めて世界は深刻に受け止めることなく、特段の施策も講じず、ウイルスの拡散を放置し続け、ただ傍観し続け、挙句の果てにこの事態を迎えてしまったことは誠に遺憾である。パンデミック（Pandemic）とはギリシャ語 $\pi\acute{\alpha}\nu$ と $\delta\eta\mu\omicron\varsigma$ から成る造語であるが、それは全ての民の謂いであり、この災禍からは誰一人として逃れられないことを物語っている。このことはまた、全ての民が当事者意識を持って、真摯かつ機敏に対処しなければならないことも意味している（実際には、大抵の当事者意識は微弱なものに留まっているように見える）。

目下、各国の政府は感染予防対策と経済活動維持の、いわゆるブレーキとアクセルの二律背反の中で混迷し、決定的な解決策を見出せないままである。度重なるロックダウンは様々な意味において確実に国家運営の基礎体力を奪っている。感染者が重篤化し死亡している現実があっても、それは病院というある意味で閉鎖された空間で起こっているために、戦争や大地震といった可視的な惨状に比べると見え難く、緊迫する恐怖感にインパクトが足りないのかもしれない（要するに実感が湧かない）。緊急事態が宣言されてみたところで、ほとんど切迫感が伝わらず、速やかに行動変容へ結び付かない事態となっていることにも、それなりの理由があるのではな

8 精神文化学研究[第 4 号]

いかと思われる。

これまでは科学者論理，つまりデータやエビデンスが絶対視され，数学的，設計主義的な合理主義によって安心と安全と安定が約束されてきたはずであったが，この度のコロナショックによって，脆くも崩れ去ってしまった感がある。むしろ，一時的なデータや部分的なエビデンスに振り回されて，全体を俯瞰する視座が不明となり，その時々専門家の情報や情緒的な「世論」の前に右往左往して，ひたすら浮き足立つだけで，全ての政策が無責任かつ場当たりに決められ，ついには方向性そのものが見失われてしまっている。付け加えれば，政治的な指導力の欠如も無残なほど浮き彫りにされてしまったので，日々，不信感が募るばかりである。縦割りに整備された社会制度は危機的状况においては無力であり，堅固なシステムであるが故に壊れやすいというパラドックスも露呈した。歴史とともに興に乗せて運ばれてきた知恵，つまり「輿論」の中にある<常識>に裏付けられた判断力さえ失ってしまった流浪の民は，日々刻々と垂れ流される<情報>に飛びつくしかないが，このことが別の問題を生んでしまっている。例えば，自粛行動ひとつを取っても，リアルとフェイクに掻き乱された情報洪水の中で，自粛警察と自粛反対といった配慮の過剰と不足の対極的な現象に結果する始末である。このような愚行が続く限り，ますます混乱は加速するし，事態は悪化する一途だろう。

『ライフシフト—100年時代の人生戦略—』で著名なリンダ・グラットン氏は，コロナ禍において求められる重要な四要素として，様々な説明に伴う「透明性」(transparency)，協力的な未来構築のための「共同創造」(co-creation)，ロックダウンや自粛生活を耐える「忍耐力」(endurance)，心身の健全性を保つ「平静さ」(composure)を挙げており，筆者もこれらの必要性について基本的には同意するが，より根本的な視点が欠けているように思う。すなわち，必要なのはデータやエビデンスを大胆に解釈する力，先を見通して大局を洞察する力，行動変容の際のバランス(平衡感覚)を取る力であり，それらの回復を求める時，立ち返るべきは歴史に棹差し「知性の修練」(ジョン・ヘンリー・ニューマン)を経て編まれた常識，つまり「良識」であり，それを担ってきたのが「人文知」なのであってみ

れば、その効用こそ改めて問われ見出されなければならない。歴史という人間の経験則に基づきながら、理知的な洞察力をもって、想像力を豊かにして今後の動向を予見し、事柄の本質に迫ろうとする強靱な思索力こそ人文知の精華であり、今まさにその役割が期待され、その能力が発揮される時ではないかと思われる。

拙稿では、感染症の歴史を照覧しつつ、現時点でのコロナ禍がもたらした時代状況を把握することから始め、次にアルベール・カミュの『ペスト』を手がかりにその精神状況を解明し、さらにコロナショック後の世界の趨勢および社会構造の変動について考察し、若干の展望をもたらしたい。

1. コロナ時代の幕開け

(1) 人類の歴史と感染症

人類の歴史と感染症というテーマでは、しばしばペストの事例が取り上げられる。史料的には6世紀の東ローマ帝国での流行、11世紀のインドからペルシャにかけての世界的流行、さらに14世紀のヨーロッパ全土におよぶ爆発的感染、17世紀のロンドンでの流行など、枚挙に暇がない。20世紀ではスペイン風邪のパンデミックが最もよく知られているが、それに引き続く世界的流行の惨禍として、21世紀初頭の新型コロナウイルスも歴史に刻まれることになるだろう。

感染症の流行期には従来の制度が大きな打撃を受けて、収束後には政治、経済、宗教を巻き込んだ大きな社会的変革がもたらされてきた。ルネサンスに象徴されるように、文化的には新たな潮流が形成されてきたことも見逃せない。ここでジョン・ケリーの見解を参照しておこう。

「ペストは恐ろしい苦しみをもたらしたが、その一方で、生きるか死ぬかの可能性が曖昧だった不安定な将来からヨーロッパを救ったのもペストだった。黒死病が到来した一三四七年の秋、ヨーロッパはマルサス学説のいう行き詰まり状態にあった。二世紀にわたって人口の急増が続いた結果、人口に対して食糧生産量が追いつかなくなりそうだった。どこを見ても生活水準は下がり、悪化していた。貧困、飢餓、栄養不良が広まってい

た。社会の流動性は失われ、技術革新の流れもよどみ、新しい発想や奇抜な考え方は危険な異端思想として抑圧された。黒死病の大量死とその後のさまざまな病気の襲来によって、その麻痺状態が終わりを告げ、ヨーロッパはふたたび勢いを取り戻した。人口が激減したため、生き延びた人びとには十分な資源の分け前ができた。そして、たいていの場合、その用い方も、より賢明になった。黒死病のあと、収穫量の少なかった農地は牧場となってより生産性を上げ、それまで穀物を挽くだけに使われていた風車や水車は、毛織物の縮絨や材木の切断など、より広範な用途をもつようになった。労働力の代わりに機械の力を利用しようと努めるなかで、発明の才も花開いた⁽¹⁾。

14 世紀のボッカッチョの『デカメロン』（1348-53 年）は、猛威を振るうペストを逃れてフィレンツェ郊外に避難した男女 10 名の貴族が悲喜こもごも各自の逸話を紹介する物語の集成であるが、当時の状況を克明に書き残した記録としても読むことができる。例えば、次のような生々しい描写がある。

「一日に数千人もが発病しました。誰も介抱してくれず、なんの助けもありません。救いの道は閉ざされたも同然です。みんな死にました。昼も夜もです。通りで亡くなった人も相当おりました。もちろん屋内で息絶えた人はもっと多かったのです。腐敗した死体の悪臭でやっと思死んだということが隣人にもわかりました。いたるところこうした死人やあしたの死人で町中が満ちました。そんな死人はたいがい隣人からどこでも同じようなあしらいを受けました。それはなぜかという、死者に対する同情や憐憫の情からではなく、死体が腐って害をなすのではないかという怖れからです。隣人は自分で手を下す人もいましたが、運び屋に頼めれば頼んで、屋内から死んだ人の遺骸を引き摺りだして、それを戸口の前に置きました。

(1) ジョン・ケリー著、野中邦子訳（2020 年）『黒死病 ペストの中世史』中公文庫、479-480 頁。

もしそのあたりを歩いたならば、とくに朝方は、数限りなく遺骸が戸口の前に放置されているのを見ることもできたでしょう。それから柩を取り寄せました。それが無い場合には板の上に遺体を置きました。また一つの柩に遺体を二体も三体も一緒に入れることもありました」⁽²⁾。

これを読むと、惨状がありありと目に浮かぶようである。こうした実情を念頭に置けば、*memento mori* の響きとともに、現世に対する無常観、あるいは現世の蔑視さらには忌避の感情が増大して、「煉獄」という他界観が生み出されたことも理解できる。また、時代は推移するが、その都度のペストに見舞われた類似の経験を共有しているという点で、ミヒヤエル・ヴォルゲムートの「死の舞踏」(1493年)やピーテル・ブリューゲルの「死の勝利」(1562年)の印象も、ボッカッチョの描写を下敷きにすることで、より強烈なものとしてリアルに受け止めることができる。厭世観の裏返しである来世観を発展させて、生きるか死ぬかの極限の問いを死生文化として具現化し、人間の実存的窮境に肉薄せんとした人文知の営為あるいは文化の挑戦をここに垣間見ることもできよう。

17世紀に活躍したダニエル・デフォーの『ペスト』(1722年)は当時の『死亡週報』などを渉猟してまとめられたものであり、歴史的記録としても一考に値すると思われるが、ペスト禍の顛末をめぐって書き留められた内容が興味深い。

「私はこの暗澹たる年の記録を終わるに際して、歴史的な事実をなおいくつか付け加えて終わりたいと考える。たとえば、この戦慄すべき惨禍からついに救われたことに対して、われわれがどれほど深い感謝をわれらの守護者なる神に捧げたことであつたか。惨禍から救われ解放された時、われわれは今さらのごとくわれわれを苦しめてきた病魔の凄絶さを思い、全国民をあげてひとしく感謝の涙にむせんだのであつた。・・・ただ神の直接のみ手のみが、ただ全能のみ力のみが、このことを可能ならしめたと、私

(2) ボッカッチョ著、平川祐弘訳(2012年)『デカメロン』河出書房新社、28頁。

は思う」⁽³⁾。

17 世紀の時点でもなお、パンデミックと神の摂理が結び付けられており、近代化や世俗化との折り合いは一体どうなっていたのか熟考に値する。つまり、感染症と宗教というテーマ⁽⁴⁾が設定されるわけだが、このことについては別の機会に譲ることにして、本稿では深追いしないでおく。

(2) コロナ時代とは何か

感染症の出現は人類の歴史に否応なく変化を与えるが、現下の私たちはどのような変質を余儀なくされるのだろうか。ウィズコロナ、アフターコロナ、ポストコロナ、ニューノーマル、ソーシャルディスタンス、新しい生活様式といった類似のスローガンが、もはや耳障りと言ってよいほどに日夜メディアから垂れ流されてくるが、要するに不要不急を避けよ、密集・密閉・密接の三密を避けよという行動の制約を求められているということだろう。しかし、これは一体どういうことなのか。はっきり言って、人間の営みは、その大半が不要不急なのではないか。人類の文化現象そのものが、不要不急の極みに他ならないのではないか（したがって、不要不急を避けよと厳命されたら、諸々の文化事業から廃れ始めるのは当然のことである）。しかし、衣食住に限定した生物的な維持と繁殖だけで、果たして人間的生と呼べるのだろうか。また、三密という親密な行動様式こそ人間の

(3) ダニエル・デフォー著、平井正穂訳（1973年）『ペスト』中公文庫、438頁。

(4) 2020年の初頭においては、宗教の迷走が目立ったように感じられる。例えば、2月20日には、新天地イエス教証しの幕屋聖殿（신천지예수교 증거장막성전）のメガクラスターが発生した。3月10日にはローマ教皇フランシスコが、聖職者に対して新型コロナウイルスによって病気になる人々に「会いに行く勇氣」を持つように、映像を通じて呼びかけた。当時のカトリック系日刊紙「アベニューレ」によると、新型コロナウイルスの感染で致死に至ったケースでは、聖職者の死者数が医師よりも多いと報道された（3月23日）。3月18日にはバングラデシュで新型コロナウイルスからの解放を祈るイスラームの礼拝（参加者は約25,000人）が行われて、信仰者による不適切な行動ではないかと批判が殺到した。「宗教のウイルスは、私たちすべてを脅かす致命的なウイルスの拡散に一役買っている」（リチャード・ドーキンス）と手厳しく批判されても仕方のない状態であったことのみ記しておきたい。

集団を作り、人間の関係を深め、人間の社会を築いてきたのではなかったのか。このままでは、私たちはお互いに疎遠となり、やがては疎外されることになる。オンラインでは伝えきれない五感を駆使して掴み取るリアルな感覚（臨場感）というものがあるはずで、これが失われてしまったら人間性そのものも変質していくのではないかと危惧される（換言すれば、デジタル化による感性の摩滅ということである）。

安心と安全と安定の金科玉条のもとに、適切な考慮も周到な省察も行われぬまま、一方的な行動変容が（場合によっては罰則規定を伴って）強要されることには重大な疑義がある。次に引用するジョルジョ・アガンベンの指摘は肯綮に中っている。

「より深刻なエピデミックは過去にもあったが、だからといって今回のような、私たちの移動まで阻止する緊急事態を宣言しようと考えた者など誰もいなかった。人間たちは、永続する危機状況、永続する緊急事態において生きることにもこれほどにも慣れてしまった。自分の生が純然たる生物学的なありかたへと縮減され、社会的・政治的な次元のみならず、人間的・情愛的な次元のすべてを失った、ということに彼らは気づいていないのではないかと思えるほどである。永続する緊急事態において生きる社会は、自由な社会ではありえない。私たちが生きる社会は、自由な社会ではありえない。私たちが生きているのは事実上、「セキュリティ上の理由」と言われているものために自由を犠牲にした社会、それゆえ、永続する恐怖状態・セキュリティ不全状態において生きるよう自らを断罪した社会である」⁽⁵⁾。

安全と安心と安定を得たいが故に、より硬直化したシステムへの編入を望んでしまう民の心性ないし特性、その背後にあるのはインフォデミック（information + epidemic）やコロナフォビア（corona + phobia）という

(5) ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳（2020年）「説明」『現代思想5 緊急特集 感染／パンデミック—新型コロナウイルスから考える—』青土社、20-21頁。

言葉で示されるような底知れぬ不安心理ではあるまいか。冒頭でも言及したように、健全な輿論を形成してきた<常識>が悉く欠落し、その代替としてインターネット上の<情報>を頼りにしたものの、真偽定かならぬ伝聞の圧倒的な量に翻弄されるだけで、調べれば調べるほど、知れば知るほど、迷妄状態に陥るといふ愚を重ねてしまった。こうなると人々のストレスは増し、不安は募る一方であり、それは未知のウイルスに対する恐怖を生み、さらに感染自体への憎悪に転じ、やがて感染者や医療従事者に対する差別を煽るといふ負のスパイラルとなった。過剰な防衛意識は自粛警察を生み出し、その正義中毒はコロナ差別を助長し、社会をより居心地の悪いものにしていく。このご時世、どこを見ても猜疑心の塊ばかりではないか。他方で、正常性バイアスからの反自粛行動も目立ち、敢えてマスクを付けずに、敢えて密なる状態を愉しむことを是とする動きも見られた。スティーブン・ピンカーが認知バイアス（社会的認知の偏り）こそ感染症予防の失敗を招くと主張したことは、これらの事態からも十分に例証されると思う。

<コロナ時代>とは、不要不急と三密を避けることが定着し、人間らしさを失っていく時代を意味しており、安心と安全と安定のために人間的自由を手放し、管理と監視と統制のシステムに嬉々として入っていく、いわゆる<ディストピア>一步手前の危機的状況を指しており、それは情報過多と不安心理に苛まれた<大衆>の精神の錯綜の上に成り立っている——このように規定しては、いささか過言だろうか。いずれにせよ、コロナ時代は幕を開けたのであり、しばらくは私たちもこの中を生き延びていかなければならない。人間らしく生きていくためには、このコロナ時代の精神状況についてより考察を深める必要があり、次に私たちは分析医として最適の一人であると思われるカミュを手がかりにしていきたい。

2. カミュの処方箋

2020年のコロナ禍において注目されたのが、カミュの『ペスト』（1947年）であった。アルジェリアのオラン市を舞台に、ペストの蔓延により隔離された都市の有り様、外部から遮断された人々の暮らしなどが物語られ

ているが、殊に心理描写が卓越しており、現在の私たちの論点を先取りしていると言える。本稿ではカミュの専門研究を意図しておらず、また筆者自身にその力量はないので、コロナ時代の精神状況を診断するという目的で、カミュの心理描写を参照することに留めたい。

まず、感染症対策によって自粛を強いられた私たちが一気に襲われた感覚について、カミュが「追放感」と表現したものが適応すると思われる。

「ペストがわが市民にもたらした最初のもは、つまり追放の状態であった。・・・実際、まさにこの追放感こそ、われわれの心に常住宿されていたあの空虚であり、あの明確な感情の動き——過去にさかのぼり、あるいは逆に時間の歩みを早めようとする不条理な願いであり、あの突き刺すような追憶の矢であった」⁽⁶⁾。

つまり、これまで平然と生きてきた日常生活から追放されてしまったということである。非日常下に置かれると、以前の何事もなかった日々の回顧に明け暮れたり（過去への逃走）、この苦境が一日でも早く過ぎ去ってほしいと平穏な明日を夢想したりするが（未来への逃避）、私たちの現在はそう簡単には変化（好転）せず、放り出された私たちに戻る場所はない。無理に日常化を演出しようものなら、感染の予防はできなくなってしまい、それだけ日常の回復は遅れて、ますます元へ戻れなくなる。

しかし、そうと分かっているにもかかわらず正常性バイアスは強く働くものであり、非日常にあっても自分だけは普通に動き回ることができると過信し錯覚する。自分の予定したことは果たされねばならず、自分の習慣にしていることは変えられない。思い通りにならなければ苛立ち、憤り、次から次へと不平不満が噴き出してくる。やり場のない怒りの矛先は政策へ、さらには政府へ向かう。直接に届かないことが分かっているからこそ、矢継ぎ早に鬱憤を喚き散らすことができる。以下にカミュの描写を引くが、見事に現状に一致している。

(6) アルベール・カミュ著、宮崎嶺雄訳（1969年）『ペスト』新潮文庫、102頁。

「この見慣れない光景にもかかわらず、市民たちは明らかに彼らの身に起こったことを容易に理解しかねていた。別離とか恐怖とかいうような共通の感情はあったが、しかし人々はまた依然として個人的な関心事を第一列に置いていた。誰もまだ疫病を真実には認めていなかったのである。大部分の者は、彼らの習慣を妨げたり、あるいは彼らの利益を冒すことに対して、特に敏感であった。彼らはそのためじれたり、いらだったりするものの、それはこの場合ペストに向ってぶっつけることのできるような感情ではなかった。彼らの最初の反応は、たとえば、施政当局に罪を着せることであった」⁽⁷⁾。

世間に疑心暗鬼が生じる中で、個人には孤立感が増し加わる。現在はオンラインで容易に他者へアクセスすることができるが、上辺だけのコミュニケーションはかえって自己を疎外する。つまり、内側に閉ざされたことによって自分自身と向き合わざるを得なくなり、自己が余計なほどに剥き出しにされてしまったのである（引きこもることによって他者との繋がりがこれまで以上に感じられるようになったというファンタジーのような評価もあり得るが、筆者はそれに与さない）。剥き出しにされた自己の苦悩、内面から湧き出る固有の問いに答えられる他者は容易に見当たらない。誰に何を話しても、どのような助言を得ても決して納得することはできず、むしろ孤絶に引き戻されてしまう。筆者も、この感覚をたびたび味わったことがある。解消することが困難な精神の桎梏というものがあり、そこから解放されようと自己を開いて他者との交わりに赴くものの、求める答えは一向に見つからず、気付かされるのは相手との距離感であり認識差であり意識差であり、さらには違和感である。このことについても、カミュは巧みな表現をもって言い当てている。

「こういう極度の孤独のなかでは、要するに何びとも隣人の助けを期待

(7) 同上, 111-112 頁。

することはできず、めいめい自分一人でその屈託ごとに対しているばかりであった。かりにわれわれのなかの一人が、ふとしたはずみで、自分の感情上の何かのことを打ち明け、あるいは話そうと試みたとしても、相手のそれに対する返事は、どんな返事であろうと、たいていの場合、彼の心を傷つけるのであった。彼はそこで、その話相手と自分とは、同じことを話していなかったことに気がつくのである。彼のほうは、実際、長い反芻と苦悩の日々の奥底から語っているのであり、相手に伝えたいと思うイメージは、期待と情熱の火で長い間煮つめられたものである。これに反して相手のほうは、あり来たりの感動や市販の商品みたいな悲しみや、十把ひとからげの憂鬱などを心に描いているのである。好意的であろうと、反発的であろうと、その返事はいつものはずれていて、結局あきらめるよりしよくなかった。あるいは少なくとも、沈黙が堪えがたく思われるような人々の場合など、他人が真の心の言葉を見つけ出せない以上は、彼らも初めから観念して売りものの言葉を採用し、自分もまたあり来たりの形式で、単純な叙述や雑報や、ある点で毎日の新聞記事のような形式で話すのであった。この場合にもまた、最も真実な悲しみが、会話の陳腐な語法に翻訳されてしまうことが通例となったのである」⁽⁸⁾。

コミュニケーション・ツールは進化し多様化し、コンビニエンスに利用できるようになったが、このコロナ禍においては、本来の意味での意志疎通はより困難に、あるいはより貧困になっていくのが見えたような気がする。パオロ・ジョルダーノが「感染症とは、僕らのさまざまな関係を侵す病だ」⁽⁹⁾と述べているが、自粛という自己隔離（翻って自己照射）がこれまでのコミュニケーションの表層的な覆いを剥ぎ取ってその本質を顕わにし、元から寸断されていた関係性を示して見せたに過ぎないとも言えるのではないか。これからどのような修復が可能なのか、道のりは険しいが、人は関わり（対話）の中でしか癒されることはないので模索し続ける

(8) 同上, 108-109 頁。

(9) パオロ・ジョルダーノ著、飯田亮介訳（2020年）『コロナの時代の僕ら』早川書房, 13 頁。

しかない。特に、信頼を失った〈言葉〉の回復は急務となる。

マスク着用が半ば義務化され、いたるところアクリル板で仕切られた、この異様な風景にも慣れてきたし、日々伝えられる「本日のコロナ感染者数」にも驚きを感じなくなってきた。非日常がいつの間にか日常化し、コロナ時代というマジックワードの中では全てが単純化され、したがってもう熱心に考え込むこともやめ、ひたすら妥協して、直近に順応する（それが得策であろうと言わんばかりに）、そのような無気力な態度が溢れかえっているように見受けられる。ここに希望の灯はあるのだろうか。カミュの警鐘に耳を傾けたい。

「われわれの町では、もう誰一人、大げさな感情というものを感じなくなった。そのかわり、誰も彼もが、単調な感情を味わっていた。「もう終わってもいい時分だ」と、市民たちはいっていたが、それは天災時においては集団的な苦痛の終了を願うのは普通のことだからであり、また実際に彼らはそれが終ることを願っていたからである。しかし、これらの言葉も、初めのころのような熱っぽさや痛切な感情はなく、ただ、われわれがまだはっきり取りとめている、つまり貧弱なものである、若干の分別をもっていわれるのであった。最初の数週の激しい、がむしゃらな衝動に続いて、一つの消沈状態が訪れ、それはあきらめと見るのは間違いであったろうが、しかしそれにしても一種の一時的な同意であるには違いなかった」⁽¹⁰⁾。

「市民たちは事の成行きに甘んじて歩調を合わせ、世間の言葉を借りれば、みずから適応していったのであるが、それというのも、そのほかにはやりようがなかったからである。彼らはまだ当然のことながら、不幸と苦痛との態度をとっていたが、しかしその痛みはもう感じていなかった。それに、たとえば医師リウーなどはそう考えていたのであるが、まさにそれが不幸というものであり、そして絶望に慣れることは絶望そのものよりも

(10) アルベール・カミュ著、前掲書、267-268頁。

さらに悪いのである」⁽¹¹⁾。

突然に日常から追放され、関係から遮断され、いつ終わるとも知れない閉塞感に望みを絶たれ、しかしその絶望的な非日常にも順応してしまう人々の有り様を、カミュは鋭い筆致で描いているが、見事に私たちの精神状態を言い当てている。『ペスト』では、献身的な医療活動や「保健隊」というボランティアの動機付けをめぐって、しばしば議論となるのだが、カミュは現実味のない英雄主義による回収を好まない。この点について、医師リウーと新聞記者ランベールとの間で交わされた対話を紹介しておきたい。

リウー：「今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということですよ」

ランベール：「どういうことですか、誠実さってというのは？」

リウー：「一般にはどういうことか知りませんがね。しかし、僕の場合には、つまり自分の職務を果すことだと心得ています」⁽¹²⁾

非日常を生き抜く術は平時と変わらぬ（その人に固有の、または不変の）「誠実さ」であり、その具体化は「自分の職務」への精励であると述べられている。どのような状況であれ自分のなすべき課題に真剣に向き合って、自分の仕事を淡々とこなすしかないのであり、その姿勢のみがコロナ禍の鬱屈に耐え、それを打破する唯一の方法なのだろう。カミュの指摘は平凡なものに見えるかもしれないが、シンプルな言葉こそ最も実現することが困難である。私たちは自分自身に対してどこまで誠実でいられるのか、自分自身の中で自己を曝け出して、徹底的に自問自答しなければならないだろう。そうしなければ私たちは不条理とは戦えず、敗退が決定的となる。

(11) 同上、268頁。

(12) 同上、245頁から抜粋。

3. コロナショック後の選択

以上、コロナ時代の特徴について述べてきたが、では今後、この成り行きをどのように見通せばよいのだろうか。コロナショックの前後で、グローバリズムは脱グローバリズムへ、国際協調主義は孤立主義へ、融和主義は排外主義へ、自由民主主義は独裁主義へ、サプライチェーンは国内生産回帰へ、それぞれ移行していくのだろうか。私たちはこれから、何を重視して、何を求めて、何を選択していくのだろうか。特にここでは、国際協調主義と自由民主主義の行方について考えてみたい。

パンデミック発生の当初から指摘されていたことは、この加速度的な感染拡大の原因は昨今の急速なグローバリゼーションによるということであり、その中におけるロジスティクスの脆弱さやSCMの失敗が何度も取り沙汰された。この論調に対して逸早く牽制を投げかけたのが、『サピエンス全史』で一世を風靡したユヴァル・ノア・ハラリであった。彼は以下のように指摘している。

「多くの人が新型コロナウイルスの大流行をグローバル化のせいにし、この種の感染爆発が再び起こるのを防ぐためには、脱グローバル化するしかないと言う。壁を築き、移動を制限し、貿易を減らせ、と。だが、感染症を封じ込めるのに短期の隔離は不可欠だとはいえ、長期の孤立主義政策は経済の崩壊につながるだけで、真の感染症対策にはならない。むしろ、その正反対だ。感染症の大流行への本当の対抗手段は、分離ではなく協力なのだ」⁽¹³⁾。

「今日、人類が深刻な危機に直面しているのは、新型コロナウイルスのせいばかりではなく、人間どうしの信頼の欠如のせいでもある。感染症を打ち負かすためには、人々は科学の専門家を信頼し、国民は公的機関を信

(13) ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳「人類はコロナウイルスといかに闘うべきか——今こそグローバルな信頼と団結を——（原題：In the Battle Against Coronavirus, Humanity Lacks Leadership）」2020年3月15日付アメリカTIME誌 (<http://bookpooh.com/archives/20710>)（最終確認：2021年1月17日）から引用。

頼し、各国は互いを信頼する必要がある」⁽¹⁴⁾。

すなわち、パンデミックを早期に収束へと導くために各国は争っている場合ではなく、積極的な情報開示やワクチンの共同開発に努めるべきであるということである。さらにハラリは、次のようにも述べている。

「今や外国人嫌悪と孤立主義と不信が、ほとんどの国際システムの特徴となっている。信頼とグローバルな団結抜きでは、新型コロナウイルスの大流行は止められないし、将来、この種の大流行に繰り返し見舞われる可能性が高い。だが、あらゆる危機は好機でもある。目下の大流行が、グローバルな不和によってもたらされた深刻な危機に人類が気づく助けとなることを願いたい」⁽¹⁵⁾。

ハラリが言うように協力と信頼による人類の連帯は理想であり、このコロナ禍を逆手にとって国際協調主義を実現することが強く求められる。これは誠に穏当な意見であり、基本的には尊重されるべき立場だと思うが、いささか優等生的に過ぎないだろうか。要するに、これは楽観的な見通しではないのか。コロナ禍の混乱に乗じて覇権を伸張する国があり、感染ルート的情報を隠蔽する国があり、コロナ後を主導する有利な手段としてワクチンは捉えられ、もはや開発競争の様相を呈しており、製薬会社や研究機関とそれに繋がる政治家は利権を掴もうと躍起になり、しかもそれは富裕な国々によって独占され、貧困な国々は後回しにされるという無情な有り様である。コロナ禍においては、残念ながら国家主義の勃興がより明白となっている。高邁な理想とはかけ離れた世知辛い現実を見る時、ハラリの提言はどうしても楽観的に映ってしまう。

「今回の危機の現段階では、決定的な戦いは人類そのものの中で起こる。

(14) 同上。

(15) 同上。

もしこの感染症の大流行が人間の間不和と不信を募らせるなら、それはこのウイルスにとって最大の勝利となるだろう。人間どうしが争えば、ウイルスは倍増する。対照的に、もしこの大流行からより緊密な国際協力が生じれば、それは新型コロナウイルスに対する勝利だけではなく、将来現れるあらゆる病原体に対しての勝利ともなることだろう」⁽¹⁶⁾。

ハラリはこのようにも述べているのであるが、皮肉なことに前者の傾向が顕著となっている。世界は今後より内向的な姿勢に転じていくと考えて、先ずはそれぞれで自衛手段を検討していくことが現実的なのではないか。

感染症対策を講じる上で、密集と移動の制限は疫学的に不可欠であるが、それを強制と服従で行ってよいのかということについても議論がある。なぜならば、隔離政策は人権侵害と紙一重だからである。それだけに慎重な検討が求められるはずであるが、緊急事態下においては、なし崩し的に強要されるのが常である。この強要に対して速やかに従った方が収束を早められるという実績が示されると、全体主義的なデジタル監視社会への移行は現実味を増すにちがいない。容易には抗えない衛生管理の名の下に「生政治」(ミシェル・フーコー)が一段と進んでいくことも予想される。コロナ禍において市場原理主義の限界と新自由主義経済(緊縮政策)の終焉が見えたと言主張するスラヴォイ・ジジエクは次のように述べている。

「隔離と生存を可能にするには、基本的な公共サービスが機能し続ける必要があり、電気、水道、食料、医薬品などが入手できなければならない。・・・これはユートピア的共産主義の姿ではなく、生き残ることだけの必要性に強いられた共産主義である。遺憾ながら、これは1918年にソビエト連邦で「戦時共産主義」と呼ばれたものの一種である」⁽¹⁷⁾。

つまり、ジジエクは「戦時共産主義」からの「災害共産主義」の到来を

(16) 同上。

(17) スラヴォイ・ジジエク著、中林敦子訳(2020年)『パンデミック』P ヴァイン、76-77頁。

「新しい共産主義」として肯定するのである。さらに次のように主張する。

「マスクや検査キット、人工呼吸器といった緊急に必要なものの製造を調整したり、ホテルやリゾートを差し押さえたり、新たな失業者全員に最低の生活を保障したりなど、国家はもっと積極的役割を担うべきであるだけでなく、これらすべてを市場メカニズムから離れて行う必要がある。観光業に従事する人たちのように、少なくともしばらくは、職も目的も失われる数千万人のことを考えてもみよ。その人たちの運命を単なる市場メカニズムや、一回限りの景気刺激策にゆだねることはできない。明白なことが、あとふたつある。ひとつは、制度化された保健医療制度は、高齢者や弱者のケアを地域のコミュニティーに依存せざるを得なくなること。もうひとつは、天秤の反対側にあるのは、リソースの産出と共有のため、何らかの有効な国際協力を組織しなければならないことである。各国が単に孤立すれば、戦争が勃発してしまう。私が「共産主義」を言う時に言及しているのはこのような協力の進展であり、それ以外の選択肢は新しい野蛮以外にない」⁽¹⁸⁾。

確かに、コロナ禍にあってジャック・アタリが言うような「命の経済」への回帰が切望され、common の再生も必要なことであるにちがいない。また、このパンデミックが延々と続き、「人工的な昏睡状態」(ポール・クルーグマン)に喩えられるリセッションから目が覚めず、そのまま金融危機、世界恐慌、ブロック経済化へ突入するような事態になると、私たちは来た道を繰り返すことになるかもしれない。いわゆる「惨事便乗型資本主義」(ナオミ・クライン)からの「野蛮」を警戒しなければならないことも十分に理解できる。しかし、その回避の方法が「新しい共産主義」であることには容易に賛同できず、もしその方向が強く打ち出されるようなことになれば、やはり私たちはまた来た道を繰り返すことになるのではないかと悲観される。このような袋小路を突破する新しい哲学的発想、マルクス・

(18) 同上, 85-86 頁。

ガブリエルの言葉を借りれば「精神のワクチン」、あるいは想像できないことを想像する「形而上学」（ジャン＝ピエール・デュピュイ）が求められるが、この最も重要な論点については稿を改めねばならない。

ウォルター・シャイデルは、歴史において伝染病の蔓延が人口増加を抑制させ、そのために労働者が激減し、結果的に労働価値が上昇して、平等化（不平等の減少）が進んだとする仮説を提唱している。そんな彼がコロナ禍以前に、次のような見解を示している。

「現代において、真に破滅的な疫病が世界中で何億もの人命を奪うとすれば、少なくとも短期的には抑制できず、国境も社会経済学的領域も越えて犠牲者が出ることは避けられないだろう。その場合、複雑で相互に結びついた現代経済や、そうした経済の高度に分化した労働市場に破壊的影響が及び、労働供給や資本ストックの評価にかかわる平等化効果を上回るかもしれない。統合の度合いがずっと低かった農耕社会でさえ、伝染病は人びとを無差別に苦しめる短期的混乱の引き金となった。長期的には、分配にまつわる帰結は、労働を資本で置き換える新たな方法によって形作られるだろう。伝染病で疲弊した経済においては、やがてロボットが、失われた労働者の多くに取って代わるかもしれないということだ」(19)。

果たして AI や 5G や IoT はコロナ時代を牽引していくのだろうか。私たちの世界が共産主義化されるにせよ、機械主義化されるにせよ、必然性の軛に繋がれた未来には人間的自由の余地はないだろう。コロナショック後、私たちは人間的自由の在り方をめぐって、重大な選択の前に立たされることになるように思う。さて、私たちは一体どう生きていくことになるのだろうか。

(19) ウォルター・シャイデル著、鬼澤忍・塩原通緒共訳（2019年）『暴力と不平等の人類史—戦争・革命・崩壊・疫病—』東洋経済新報社、560頁。

結論

コロナ禍において、これまで万能と信じられてきたデータやエビデンスに基づく数学的、設計主義的な合理主義への不信は深く、私たちが依拠すべき指針のない時代への不安も増している。否が応でもパラダイムシフトに直面していく私たちは、瓦解した権威主義の残骸を踏み越えて、拠り頼むべき何かに辿り着くことはできるのだろうか。自由民主主義の価値を守り通すことはできるのだろうか。頼るものが何もない時代には、徹底した自己責任だけが求められるのだろうか。これからの選択は人類の（人間としての）命運を左右することになるだろう。まさに私たちは歴史の真っ只中を生き、世界的転換の分水嶺に立っている。

現状にあっては、好むと好まざるとにかかわらず、オンライン化とデジタル化は避けられない。ある意味では、来るべきものが早く来ただけのことなのかもしれない。多少の戸惑いもあるが、オンライン化とデジタル化には新しい文化変容をもたらす可能性があることも認めねばならないだろう（例えば VR, E-sports, Streaming など）。

しかし、人間と機械、あるいはアナログ思考とデジタル思考は異なっている。つまり、必然性（目的合理性）に貫徹された機械とは違って、人間には無駄が許されるし、生は偶然性にかかっている。想像の翼は数理的な予測とは異なる創造の可能性を広げていく。例えば、ナビゲーションシステムは目的地まで迷わず確実に人や物を届けられるが、人間は道を間違ったり、回り道をしたり、寄り道をしたりして、心許ないわけである。だが、そのことによって新しい発見に遭遇したり、新しい着想を獲得したりして、全く予測できなかったような劇的な人生行路へと導かれることもある。それこそが、人間的自由の価値に他ならない。

この価値を奪うのは新型コロナウイルスではなく、私たち自身である。そのことを弁えておくことが、まずはコロナ時代を生き抜くための備えとなるだろう。どのような時代が訪れるのか誰にも分からないが、人間の本源は不変であり、人間的自由の価値は守り通すべきである。現実的に起こり得ることとして、共産化と機械化が手を携えて、デジタル監視社会が到来し、行動の自粛から精神の萎縮がもたらされることを憂慮する。精神の

萎縮は人文知の絶滅を意味する。豊かな人文知は人間的自由とともにある。人間的自由が奪われたところに、人間の生きる世界はない。

本稿は「コロナ禍における人文知の力」について構想を練っている筆者の予備的考察であり、現状の確認と論点の整理を行ったに過ぎない。見出された課題が多くあるため、本格的な論究は今後二期することとする。

[参考文献]

- アルベール・カミュ著、宮崎嶺雄訳（1969年）『ペスト』新潮文庫。
- ダニエル・デフォー著、平井正穂訳（1973年）『ペスト』中公文庫。
- 立川昭二（2007年）『病気の社会史—文明に探る病因—』岩波現代文庫。
- ボッカッチョ著、平川祐弘訳（2012年）『デカメロン』河出書房新社。
- ウォルター・シャイデル著、鬼澤忍・塩原通緒共訳（2019年）『暴力と不平等の人類史—戦争・革命・崩壊・疫病—』東洋経済新報社。
- ファリード・ザカリア著、上原裕美子訳（2020年）『パンデミック後の世界 10の教訓』日本経済新聞出版。
- ジャック・アタリ著、林昌弘・坪子理美共訳（2020年）『命の経済—パンデミック後、新しい世界が始まる—』プレジデント社。
- ジャン＝ピエール・デュピュイ著、桑田光平・本田貴久共訳（2020年）『ありえないことが現実になるとき—賢明な破局論にむけて—』ちくま学芸文庫。
- ジャレド・ダイヤモンド、ポール・クルーグマン、リンダ・グラットン、マックス・テグマーク、スティーブン・ピンカー、スコット・ギャロウェイ共著、大野和基編（2020年）『コロナ後の世界』文春新書。
- ジョン・ケリー著、野中邦子訳（2020年）『黒死病 ペストの中世史』中公文庫。
- ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳（2020年）「説明」『現代思想 5 緊急特集 感染／パンデミック—新型コロナウイルスから考える—』青土社、20-21頁所収。
- 神野正史監修（2020年）『感染症と世界史』宝島社。
- 小長谷正明（2020年）『世界史を変えたパンデミック』幻冬舎新書。
- パオロ・ジョルダーノ著、飯田亮介訳（2020年）『コロナの時代の僕ら』早川書房。
- スラヴォイ・ジジエク著、中林敦子訳（2020年）『パンデミック』Pヴァイン。

ユヴァル・ノア・ハラリ著，柴田裕之訳「人類はコロナウイルスといかに闘うべきか
—今こそグローバルな信頼と団結を—（原題：In the Battle Against
Coronavirus, Humanity Lacks Leadership）」2020年3月15日付アメリカ
TIME誌(<http://bookpooh.com/archives/20710>)（最終確認：2021年1月17日）。

※本稿は2020年9月12日に開催された精神文化学会2020年度特別講演会（オンライン）で発表した「コロナ時代における人文学の可能性」の内容に基づき，その後の考察も踏まえて修正加筆を施したものである。